

＝ 第 25 号 ＝

発行日:2007年11月1日

編集:立命館大学応化会事務局  
編集責任者:金川 義孝

〒525-8577  
滋賀県草津市野路東1-1-1  
立命館大学応用化学系事務局内  
TEL. 077-561-2658  
FAX. 077-561-2659  
e-mail oukakai@st.ritsumei.ac.jp

# RITS 立命館大学 応化会 ニュース

## 会長就任にあたって

会長 北尾 舒彦

(昭和三十九年卒)



学応化会第九回総会において、はからずも皆様方のご推挙により、応化会の会長に就任致すことになりました。

過去二十四年間、諸先輩が築いてこられた応化会を維持し、そして更に発展させるために、会長としての責務の大きさと重さに身の引き締まる思いでございます。

微力ではございますが、応化会の発展に尽力してまいりたいと存じますので、皆様のご指導・ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。早速ですが、当応化会を運営していく上での幾つかの希望を述べたいと思います。

一、応化会諸行事への参加者を増やすこと。

現在応化会の行事としては、総会、常任幹事会、幹事会、四つの

各種委員会、ゴルフとハイキングの同好会、健康セミナー、関東と

東海と中国・四国各支部の会合などがあります。

① 一・一・一運動即ち「一年間に一人が、新しく一人の参加者を勧誘し、増やす」運動を応化会活動にも取り入れ、日常生活のあらゆる機会をとらえて、関係者全員が、この事を心掛ければ、応化会活動も活発になるものと思えます。

② 会員の皆様が、興味を持って参加したくなる様な新たな同好会やセミナーを模索する。

③ 研究室や卒業年度単位の間窓会の開催を奨励して、会員同志の会う機会を増やす。

④ 支部活動の活性化  
当応化会の会員は、日本全国におられるので、支部活動は今後重要になるものと思えます。

現在、関東、東海、中国・四国の三支部が、結成されたところではありますが、この三支部の活動をまず軌道に乗せてもらい、次に他の地域での支部結成を働きかけていきたいと考えます。

二、応化会名簿の充実

応化会名簿は活動の基礎になるものです。

現在、九千三百余名が名簿に掲

載されていますが、この中で住所の明確な人は、約七千名です。

毎年入会される新入会員は約二百名であります。一方転居で住所がわからなくなる方が、毎年約二百名おられますので、この「応化会ニュース」を送送する部数は、ここ数年七千部とほとんど変わっておりません。

従いまして、会員の皆様が転居されましたら、必ず住所変更届を応化会事務局へもご提出頂きたいと思っております。

また、お友達の中で、応化会ニュースを受け取っておられない方が、ございましたら、正確な住所を事務局までご一報下さい。

最後になりましたが、副会長・幹事はじめ、すべての役員の方々のご協力を得て、応化会の発展に努力して参る所存ですので、皆様方の温かいご支援を賜ります様重ねてお願い申し上げます。が、会長就任の挨拶といたします。

深秋の候、会員の皆様方におかれましては、各界各分野にて益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。また、日頃は応化会の運営につきまして、何かと格別のご支援・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、この度、平成十九年六月十七日に開催されました立命館大



# 変革のとき

応用化学系前期学系長 若山 守



応用化学系前期学系長 若山 守

くお過ぎのことと、お喜び申し上げます。年に一度発行される本誌を心待ちにしておられる方、届いた郵便物のなかに予期せず本誌を見つければ、ふと大学時代に思いを馳せる方など、本誌に寄せる思いは様々あるとは思いますが、四半世紀に亘り多くの会員の皆様方に支えられて、ここに二十五回の節目の発行を迎えることが出来ましたことを、心からお礼申し上げます。応用化学系の現在、将来に関する話題を通じて皆さんに母校の様子を伝え

る役割を果たしており、かつ、マスメディアを通じた立命館学園の広報活動では知ることが難しい学園内部のちょっとした情報や学園内の雰囲気や会員の皆様に共有して頂くための役割を担ってきたのではないかと思っております。今後とも、こうした会員の皆様的心をつなぐ役割を担っていきたくと思っております。

さて、新聞や各種メディアを通じて大々的に広報されていることから、会員の皆様はすでにご存知のことと思いますが、立命館大学では、ライフサイエンス分野の教育学・研究を充実するため、〇八年度より新たに生命科学部と薬学部との開設を予定しております。既存の理工学部、情報理工学部と合わせて理工系四学部体制になります。これに伴い、これら四学部を教学研究、人事で統括するような組織を構築し、学部の枠を超えた体制作り（総合理工学院）も模索して

おります。生命科学部は応用化学科、生物工学科、生命情報学科および生命医科学科の四学科で構成され、薬学部は薬学科の一学科のみです。既存の理工学部応用化学科、化学生物工学科および情報理工学部生命情報学科がカバーしていた領域に、新たに基礎医学と薬学領域を導入することにより、学部・学科の垣根をより低くした「融合型ライフサイエンス教育・研究」を展開していきます。新学部・新

学科は、基本的に化学を基盤とする学部・学科であり、化学科を出発点とする現応用化学系二学科と生命情報学科が拡大発展したものであります。化学系分野が生命・生物系分野と融合しながら広がったことになり、応用化学系と致しましても更なる発展を遂げたことになりました。

こうした新展開に関連して教職員事情を述べますと、応用化学科の河口先生と谷口先生が三月末で定年ご退職になりました。四月から、河口先生は非常勤教員として講義・実験を担当されており、引き続き応用化学系の教育にご協力いただいております。谷口先生は特別招聘教授として、生命科学部・薬学部設置に尽力頂

いております。また、〇八年度からは生命科学部の初代学部長として新学部の舵取りを務められることになっております。一方で、大変残念で悲しいお知らせもしなければなりません。極微機能化学研究室を担当されていた西尾悟先生が昨秋他界されました。まさにこれからという時に突然の訃報に接し、応用化学系全体が深い悲しみ

に包まれました。ご冥福をお祈りいたします。次に、今年度着任された先生方を紹介します。高分子材料化学分野の担当教員として堤治先生が准教授として着任されました。生命科学部・薬学部の設置に伴う先行人事として、応用化学科に木村富紀先生、化学生物工学科に下妻晃二郎先生と西澤幹雄先生が教授として着任されました。

任期制教員として、化学生物工学科に准教授の溝口正先生が、応用化学科に助教の橋新剛先生、化学生物工学科に助教の矢野成和先生がそれぞれ着任されました。また、応用化学系事務室には、昨秋から金澤乃理子さんが勤務されており、既設学科のすべての教員が新学部・新学科へ移籍するわけですが、基本的に、新応用化学科と

用化学科と旧化学生物工学科に所属する教員が移籍します。ただし、応用化学科の加藤先生、木村先生、化学生物工学科の今村先生、民秋先生、前田先生は薬学科へ移籍されます。また、応用化学科の白石先生が生物工学科へ、化学生物工学科の小野先生、里見先生、下妻先生、西澤先生が生命医科学科へ、溝口先生は応用化学科へ移籍されます。

先に述べましたように、生命科学部・薬学部の設置に伴い、様々な広報活動が展開されております。新聞広告や電車内広告などの各種メディアを介した広報に加えて、東京、名古屋、滋賀における著名人を講演者やコメントーターに迎えたサイエンスフォーラムや利根川進先生、江崎玲於奈先生、トーステン・ウィーゼル先生をお迎えしてのノーベルフォーラムの開催が予定されており、新学部・

生命科学部・薬学部の説明会にあたる二〇〇〇名の参加者があ

# 第九回 総会 開催報告

本年六月十七日(日)午後一時より、京都タワーホテル九階「飛雲の間」に於いて、第九回総会が開催された。五十五名の会員が出席し、各種委員会等の報告、ならびに二〇〇六年度事業報告・決算報告、会則変更、役員選出、二〇〇七年度事業計画・予算等の審議が行われた。松田幹事の司会で開会し、まず過去三年間に逝去された会員に対して黙祷を行った。続いて、木村会長の挨拶、さらに仲宗根関東支部長および宮川中国・四国支部長からそれぞれ挨拶ならびに支部活動報告が行われた後、議長に香山氏を選出し、議事が進められた。

名簿管理委員長、篠原地域活動推進委員長より、それぞれ委員会報告が行われた。

四、花崎幹事より二〇〇六年度事業報告、高木幹事より二〇〇六年度決算報告が行われ、会計監査報告の後、承認された。

五、花崎幹事より会則別表の変更に関する提案説明がなされ、承認された。

六、役員選出について、松田幹事より幹事会および常任幹事会における審議経過が説明され、さらに上原役員選考委員長より役員選考委員会での審議経過が説明された。審議の上、会長、副会長、顧問が原案通り承認され、会計監査が選出された(詳細は別紙参照)。その後、名誉会員、各種委員会委員長、常任幹事、庶務幹事、および会計幹事の紹介が行われた。

七、花崎幹事より二〇〇七年度事業計画、高木幹事より二〇〇七年度予算案についての提案説明が行われ、承認された。

八、北尾新会長ならびに新役員の紹介が行われた後、北尾新会長の挨拶が行われた。

その後、本学校校友会事務局長の志垣氏より本年度の全国校友大会(東京にて開催)の紹介が行われた後、閉会した。

総会終了後、同会場にて講演会が行われた。まず、『化学を中心とした新学部「生命科学部・薬学部」の二〇〇八年四月設置に向けて』と題して、本学特別招聘教授・同名誉教授で、新設の生命科学部の学部長予定者である谷口吉弘先生の講演が行われた。さらに、本学応用化学科教授で薬学部薬学科教授に就任予定の木村富紀先生により、『感染症を巡る最近の話題：新型インフルエンザ流行への備え』と題した講演が行われた。講演会への参加者は六十一名で、それぞれの講演後、活発な質疑応答が行われた。

講演会終了後、会場を同ホテルの六階「ナポリ」に移し、五十五名の参加者による懇親会が盛大に開催された。途中、衣笠キャンパスやびわこ・くさつキャンパス、さらには昨年竣工した朱雀キャンパスの最近の写真がスライド上映され、最近のキャンパスの変貌に驚きの声が上がった。二時間あまりにわたって和やかに親睦を深めた。

総会での議事内容

一、松田幹事より、前回総会以降の応化会の経過等について報告があった。また、花崎幹事より前回総会の議事録の説明がなされ、承認された。

二、過年度(二〇〇四、二〇〇五年度)の事業報告が花崎幹事より、決算報告が高木幹事より行われた。

三、篠原企画運営委員長、北尾応化会二ユース編集委員長、上原

え、配布資料が不足するなど、大盛況となりました。こうした人氣も、応化会会員の皆様が築いて来られた伝統と実社会における実績の賜物と感謝しております。とは言え、少子化の影響による大学就学人口の激減や学生の理科離れが指摘されるなか、優秀な学生を確保し続けることは容易なことではありません。志願者確保に向けた施策と努力は欠かせません。四つの付属高校や協定校との間の連携強化や入試に対する施策はもちろん大切ですが、つまるところ、立命館大学の教育力と研究力を向上させ続けること以外に、確実に持続的な志願者の確保を保障するのはありません。

この変革に際して、教職員一同、新展開する応用化学系の教育・研究に全力を尽くして参る所存であります。皆様方の一層のご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。最後に、皆様のご健勝と一層のご活躍をお祈り申し上げます。

二、過年度(二〇〇四、二〇〇五年度)の事業報告が花崎幹事より、決算報告が高木幹事より行われた。

三、篠原企画運営委員長、北尾応化会二ユース編集委員長、上原



87



総 会



懇 親 会



総 会

# 化学を中心とした新学部

## 「生命科学部・薬学部」の

### 二〇〇八年四月の設置に向けて

谷口 吉弘

「二十一世紀は生命科学の世紀」といわれ、生命科学を基礎とした科学技術が社会や生活に深く浸透することが予想されます。二十一世紀の社会が持続的な発展を遂げていくために必要な医療・健康・環境・食糧・エネルギーなどの分野において、生命科学に関する教育・研究が果たす役割に大きな期待が寄せられています。立命館大学はこれらの社会的要請に応えるために、「生命科学部（生命医科学科、生物工学科、生命情報学科学科、応用化学科）」と「薬学部（薬学科学科）」の二学部を二〇〇八年四月、「びわこ・くさつキャンパス」に設置するための準備を鋭意進めています。

（一九四九年）新立命館大学の発足に伴い、立命館専門学校は理工学部で改組され、「応用化学科」と「化学科」は統合されて、純正化学課程と工業化学課程を有する「化学科」となり、この体制は、平成六年（一九九四年）の理工学部が「衣笠キャンパス」から「びわこ・くさつキャンパス」へ移転するまで続きま

「生命科学部」と「薬学部」の二学部の設置に伴って、既存の「応用化学科」は、原子・分子レベルの理論と技術を駆使し、さまざまな物質の機能解明や新物質を創製するための現代化学を展開します。材料・エネルギーなどを対象とする応用化学コースと生体物質などを対象とする生命化学コースを用意し、エネルギーや環境問題など、社会の重点課題の解決に取り組みます。従来の「化学工学科」は「生物工学科」に名称変更して、化学、生化学、生物学、医学などの専門知識をベースに、環境、医療、食糧、バイオエネルギーなど、多様な分野で研究を展開します。環境・生態系の解明および生物資源の有効的な活用によって、人類が安全に安心して暮らせる持続的社会的実現を目指しています。応用化学科所属の白石晴樹教授は生物工学科に移籍されます。「生命情報学」では生命科学と情報科学の融合によるバイオインフォマティクス（生命情報学）分野の研究を展開し、ライフサイエンスの研究に役立つ新しいソフトウェアやシステムの開発を行います。新たに設置される「生命医科学科」では「健康とはどのような状態か」「病気の原因のメカニズムは」など、生命と医療の根源的な問いにアプローチします。基礎生

物学や生物工学、基礎医学を重点的に学ぶことで複雑精緻な生命現象を解明し、疾病予防などの予防医学を中心に生命システムの探求と医科学研究を展開します。既存学から新学科に移籍される先生は、化学生物工学科からは小野文一郎教授と里見潤教授、下妻晃二郎教授、西澤幹雄教授、生命情報学からは、早野俊哉教授と水野勝重准教授です。六年制の「薬学部」薬学は化学系薬学、生物系薬学、医療系薬学からなり、研究領域は、創薬、調剤学、薬理学、生物薬剤学、衛生化学、天然物化学、微生物学、免疫学、薬物動態学です。チーム医療に携わる高度かつ実践的な臨床薬剤師養成のための教育にとどまらず、これまでに培った理工学系、情報系教育を背景とした、質の高い薬学教育とともに医薬品開発研究にも挑戦します。既存学から薬学部に移籍される先生

は、応用化学科からは加藤稔教授と木村富紀教授、化学生物工学科からは今村信孝教授と民秋均教授、前田大光准教授、生命情報学からは浅野真司教授と鈴木健二教授、藤田典久教授、一川暢宏教授、藤田卓也教授です。一九三八年、立命館大学高等工科学科の一学科として誕生した「応用化学科」は、七十年後の今日、化学を中心とした「生命科学部」と「薬学部」の二学部に大きく飛躍することになります。これも一重に「応化会」の皆さんの化学系学科への長年にわたる熱い思いと支援があればこそ、実現できたものと深く感謝いたしております。今後とも、新生物学部の発展のために、一層の力強いご支援をお願いいたします。

## 「感染症を巡る最近の話題」

### 新型インフルエンザ流行と備えについて

木村 富紀

二十世紀初頭、全世界人口の死亡原因に感染症が占める割合は減少し一時期感染症は既に征服された過去の病気だとする論調も見

~~~~~

受けられるほどでした。ところが二十一世紀を目前にした一九九九年でも感染症はなお全死因の二割を占め、予想された撲滅レベルにはほど遠い現状です。これには、AIDSやSARSなど過去四十年間に確認された三十九種類にも及ぶ新たな感染症や、古くて新しい感染症の筆頭にあげられる多剤耐性菌によるマラリアや結核症など、従来の教科書には取り上げられなかった新興・再興感染症が大きく関与しています。これら新興・再興感染症のうち、WHOが先頃発表した“The World Health Report 2007”において現実的な脅威として最も憂慮されているのが、H5N1型高病原性トリインフルエンザウイルス (HPAIV) の世界流行の可能性です。

このH5N1型HPAIV感染が一九一八年に全世界で約五千万人を死亡させたスペイン風邪の再来となるには、以下に述べる条件を満たす必要があります。すなわち、

一、多くの人がHPAIV感染に全く免疫を有さない。

二、トリウイルスであるHPAIVがヒトに対し感染できるようになる。

三、ヒトで増殖したHPAIVが他のヒトに次々と感染を拡大

させる(この段階に到達したHPAIVを新型インフルエンザウイルスと呼びます)。

一九九七年に香港で初のヒト感染が認められたH5N1型HPAIVは条件一のみならず、八月二十三日現在インドネシアの百五症例を筆頭に三百二十二症例(致死率六十一%)の感染・発症が報告されている事から、条件二も既に満たす事が知られます。しかしこれらの症例では、患者の大多数はHPAIVに感染して死んだ二ワトリなどを素手で取り扱う等から偶発感染しており、また少数例報告されているヒト-ヒト間の伝播も枕頭看護した患者家族にほぼ限定される事から、ウイルスは条件三のハードルを未だ乗り越えていないと考えられてきました。

これは一つには、四十一℃と高温のトリ腸管環境に由来するH5N1型HPAIVが、三十三℃と格段に温度が低いヒトの口腔、咽頭や鼻腔の粘膜では増殖しがたいという特性に由来します。すなわち、口や鼻、のどにおいて一度増える事ができなければ、感染を成立させるためのレセプターが存在する肺胞レベルにまで、H5N1型HPAIVは十

分量のウイルスを送り込む事ができなかつたわけです。従って、これ迄ヒトに感染が成立するには、肺胞に到達できるほどの多量のウイルスが含まれた糞に汚染された塵埃を直接吸い込むような誘因が必要でした。

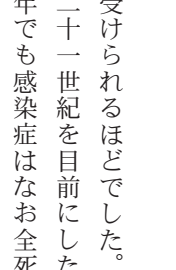
ところが最近になって、ベトナムのヒト症例の咽頭サンプルから分離したH5N1型HPAIVに三十三℃において増殖を可能にする遺伝子の突然変異が見いだされ、この変異ウイルスは口腔、咽頭や鼻腔などヒト上気道において通常より十万倍も効率よく増殖できる事が確認されました。実は、二〇〇五年四月にモンゴル近郊の中国青海湖に繁殖のため集まった野生の水鳥数万羽を殺したH5N1型HPAIVが、既にこの遺伝子変異を獲得していた事が分かっています。しかもこの変異ウイルスに感染した渡り鳥が、現在のヨーロッパやアフリカにおける家禽集団内の流行をもたらしたと考えられる事から、H5N1型HPAIVが先にあげた条件三をいよいよ満たし、新型インフルエンザウイルスとして世界流行をもたらす日は近いとWHOは警鐘を鳴らしています。

最後に、最近出席した学術集会で話題になった新型インフルエンザの世界流行に対する、国や府県

レベルでの対策を紹介します。オーストラリアでは世界流行が確認された後、国境を閉鎖し新たな患者の入国を阻止した上で、国内患者の隔離を予定します。これらの措置により、可能な限り(六ヶ月が目標)国内への蔓延を遅延させます。ヒトインフルエンザ治療薬のタミフルが新型インフルエンザに有効である保証は現時点ではありませんが、医療従事者への予防投薬に備蓄の六十五%を当てる事にしています。日本における国としての対策は、公表されていないため不明です。ただし、地方レベルでは既に対策を策定、公表している都道府県もあり、例えば長野県は、オーストラリアと同様に早期発見により初発患者とその接触者を効率的に収容・隔離し、感染伝播の機会を最小にする事を計画しています。その目的で、社会活動の制限(学校/職場の閉鎖等)とこれに伴う食糧・水の配給を行うと共に、既存の医療機関の効率的な利用を図ります。具体的には、受診患者に対し治療を受ける優先順位付けのための判定(これをトリアージと称します)を行ない、限られた医療資源を効率よく活用し、発症、死亡数が最小限になるよう努めることにしています。

これらの対策は全て、感染の機会を最小限にすることで、当該国や当該地域において流行の封じ込めや流行伝播の遅延化を図るとともに、人々の生活への影響をできるだけ限定することを意図します。これらの努力によって許される猶予時間を使い、われわれウイルス研究者はこの新型ウイルスに対するワクチン開発・製造に全力を挙げる事になります。H5N1型HPAIVに対するワクチンは既に実地臨床の場において治験段階にまで進んでいます。これはあくまでもトリインフルエンザに対するワクチンであり、ヒト集団において流行する新型インフルエンザに有効性を保証できる訳ではありません。確実に有効なワクチンを製造するためには、やはり新型インフルエンザウイルスそのものが必ずやあり、このウイルスは見え隠れするものの、未だ地平線にはつきりとはその姿を現していないからです。

(本稿では、去る六月十七日の第九回総会席上で行った講演の内容をまとめ、これに最新の知見を追加しました。)



他のヒトに次々と感染を拡大

させる(この段階に到達したHPAIVを新型インフルエンザウイルスと呼びます)。

一九九七年に香港で初のヒト感染が認められたH5N1型HPAIVは条件一のみならず、八月二十三日現在インドネシアの百五症例を筆頭に三百二十二症例(致死率六十一%)の感染・発症が報告されている事から、条件二も既に満たす事が知られます。しかしこれらの症例では、患者の大多数はHPAIVに感染して死んだ二ワトリなどを素手で取り扱う等から偶発感染しており、また少数例報告されているヒト-ヒト間の伝播も枕頭看護した患者家族にほぼ限定される事から、ウイルスは条件三のハードルを未だ乗り越えていないと考えられてきました。

これは一つには、四十一℃と高温のトリ腸管環境に由来するH5N1型HPAIVが、三十三℃と格段に温度が低いヒトの口腔、咽頭や鼻腔の粘膜では増殖しがたいという特性に由来します。すなわち、口や鼻、のどにおいて一度増える事ができなければ、感染を成立させるためのレセプターが存在する肺胞レベルにまで、H5N1型HPAIVは十

分量のウイルスを送り込む事ができなかつたわけです。従って、これ迄ヒトに感染が成立するには、肺胞に到達できるほどの多量のウイルスが含まれた糞に汚染された塵埃を直接吸い込むような誘因が必要でした。

# 定年退職にあたって

河 口 昭 義



に接したものですから、学生に対して不満を当初は覚えました。学生からの抗議もありました。ここは学部を中心とした大学なんだ、と気が付くのに一年を要したでしょうか。また、私学の置かれている状況も判りました。私自身反省し、内容を改め試行錯誤で教育に当たってきましたが、学生から高い評価が得られたとは思えず、教育の難しさを痛感しました。当時はまだ授業評価など無く自由な雰囲気があり、研究、教育については先生の裁量に任されていたことで救われた思いがあります。

できました。それに伴って、私と研究を共にしてくれる学生も集まるようになり、彼らの努力のお陰で、成果を手に学会に参加ができました。成果を世界に問うことが出来るようにもなりました。学生諸君に研究の面白さも知って貰うことが出来たのではないかと思つています。私自身は、若い人には本当に「活力」が有るんだな、と彼らの力を再確認した次第です。

今日、私の友人知人から、立命館大学の世評の良いことを耳にします。一九九四年当時を顧みますと、バブル崩壊で世間の景気も悪く、学生には就職難の時代でした。就職先の開拓に先生方が企業訪問したこと、その他諸々のことについては、十年ひと昔というのでしょうか、昔日の感があります。時代が改革、改革と言われ、実力が求められる風潮に世の中が変つてきて、そのニーズに応えるべくこれまで行ってきた先生方の労が報われたのは確かでしょう。現在では、少子化という新たな波に煽られ、ある意味で大学の生き残り

を賭け、更なる改革を求められているようです。応用化学科も改革は避けられず、その目的のために新しい学部学科へ二〇〇八年には移行することが決まっています。若い時から拡大一途の時代を経験している私

に接したものですから、学生に対して不満を当初は覚えました。学生からの抗議もありました。ここは学部を中心とした大学なんだ、と気が付くのに一年を要したでしょうか。また、私学の置かれている状況も判りました。私自身反省し、内容を改め試行錯誤で教育に当たってきましたが、学生から高い評価が得られたとは思えず、教育の難しさを痛感しました。当時はまだ授業評価など無く自由な雰囲気があり、研究、教育については先生の裁量に任されていたことで救われた思いがあります。

以前の研究所では、修士以上の大学院生、ある意味では研究者ばかりが相手でした。立命館大学に来たからは学部学生が中心で、しかもその数は桁違いに多く、学生との接し方、講義の内容などそれに対応しなければならなかったにも拘らず、私は以前のままの感覚、考え方で学生

にとつては、今の厳しい競争の時代、先行きの見えない危うさを感じられてなりません。応用化学科の改革は成功しなければならぬし、先生方

のご努力で必ずや学科をいい方向に導いて頂けるものと確信しています。応用化学科の発展をお祈りします。

## 河口昭義先生の

### ご定年退職にあたって

中 村 尚 武  
(昭和四十一年卒)

河口昭義先生は二〇〇七年三月末日をもつて定年によりご退職になりました。お元気でご定年をお迎えになられたことを、心よりお喜び申し上げます。

さて、河口先生は岡山大学大学院のご出身です。アイリングの「絶対反応速度論」の翻訳で知られた平井西夫先生の下で学ばれ、修士課程修了後、京都大学化学研究所へ勤務されました。小林恵之助先生の研究室

で電子顕微鏡の理論と実技、またX線回折を勉強され、これらを研究手段として、高分子の構造、高次構造及びその形成機構について研究されてきました。立命館大学理工学部が一九九四年四月、発展的にBK Cへ移転した際、応用化学科に高分子機能を専門とする研究室を創設することになりました。その研究室にお迎

えしたのが河口先生でした。

先生は、毎日、電車とバスで大学へ通つておられました。バス停からかばんを手に提げ、時には脇に抱えて、そして、ほんのチョットだけ前かがみの姿勢で悠然と研究室へ歩いて来られる。最近、非常勤講師をお願いした日だけしか、そんな先生のお姿にお目にかかれませんか。寂しい限りですが、今後も私共後輩を暖かく見守って下さいませよう。お願い致します。長い間有難うございました。

# 定年退職にあたって

谷口吉弘



移転を含めた理工学部の大規模な将来構想を策定し、第四次長期計画委員会「第一次答申」第二プロジェクト部会長として理工学部再編、第二キャンパス問題を答申しました。

その背景には、理工学部は

昭和三十六年（一九六一年）に立命館大学理工学部化学科に入学して以来、平成十九年（二〇〇七年）三月に定年退職するまで、実人生の三分の二を化学科で過ごしたことになります。この間、実験室の移転を三度経験し、まさかキャンパスが滋賀県に移転して、毎日通勤するとは夢も思ってもみませんでした。一九九四年の理工学部の「びわこ・くさつキャンパス」への移転は、在任期間中で最も思い出に残る出来事の一つであり、また最も深く関わった役割の一つでもあります。教授に昇任してまもなく、当時の調査広報室長から「立命館学園二十一世紀戦略構想」の策定にあたり、理工学部の件で協力を依頼されたのが事の始まりでした。その後、「二十一世紀学園構想委員会」が設置され、理工学部調査委員長として、キャンパス

をリードするような理工学部を作るためには、むしろ規模を拡大し、すくなくとも経常勘定において自立の道を開く必要がありました。

このような理由から、理工学部・大学院学生数規模を学部一年一千名（四学年で四千名）+修士大学院に一年生五百名（二学年一千名）の計五千名規模を目指すことにしました。時を同じくして、滋賀県と草津市から大型公私協力

の申し出があり、滋賀県草津市に約二十万坪の広大な校地を手に入れることができました。一九九四年にこの広大なキャンパスに理工学部が移転して以来、一九九八年には経済・経営学部が移転を実現し、二〇〇四年には情報理工学部が設置され、今、二〇〇八年三月の完成を目指して、生命科学部・薬学部棟が建設中です。

二〇〇七年三月、定年退職し、現在、生命科学部・薬学部設置委員長代理として、化学を中心とした「生命科学部・薬学部」の設置に向け鋭意取り組んでいます。また、設置後は生命科学部長として、二学部の教育研究管理運営についてその役割を果たす予定です。理工学部の「びわこ・くさつキャンパス」への移転を機に、立命館大学が大きく飛躍し発展している

姿を見ることが、理工学部の再編拡充と第二キャンパスの策定に深く関わった一人としてこの上ない喜びです。また、出身学科の生命科学部・薬学部への再編拡充と新

## 谷口吉弘先生の

### ご定年退職に当たって

澤村精治  
(昭和四十九年卒)

谷口吉弘先生は、昭和四十五年三月に立命館大学大学院理工学研究科応用化学専攻を修了され、同年四月から鈴木啓三先生の物理化学研究室の助手として着任されました。学位取得にあたり、立命館の課程博士第一号になられたことは、学内では有名な話です。その後、助教、教授と昇任され本年三月にご定年退職されるまで、三十七年の長きにわたり理工学部の教育・研究の発展に貢献されてきました。先生のご興味は、高分子物理化学から生体高分子科学へと進む中、従来、固体用であったダイアモンドアンビルセルの溶液への適用、高圧ラマン分光装置、高圧NMR装置など様々な研究手法を立ち上げ、現在一般に普及しているこれらの手法の草創期には必ず名前の出てくる開拓者として、活躍して

展開に微力ながら寄与できることはこの上ない幸せと感じています。これも一重に「応化会」の先輩方の絶えざる励ましとご支援のおかげで、深く感謝申し上げます。

これれました。こういった先見の明を持ったご活躍は、学内の行政においても手腕を発揮され、びわこ・くさつキャンパスの創設計画においては理工学部執行部の一員として、敷地探しから検討を始められ、また大学のリエゾン制度の創設、英語のみで教育・研究する大学院国際コースの創設など、当時日本の大学にはまだほとんど芽生えていなかった新たな制度の質的な原案作りに活躍されたと聞いています。学外においても、滋賀県の産業教育審議会会長はじめ、文部科学省、経済産業省などの各種委員を歴任されるなど、広い視野をもって日本の科学技術の発展に寄与してこられました。本年をもってご定年ではあります。二〇〇八年度からは新設の生命科学部長として就任される予定であり、平成十年から十三年の理工学部長に続いて二度目の学部長に就任されることとなります。ご健康に留意され、学内外での益々のご活躍をお祈り申し上げます。

# 大瀧仁志様

のご冥福を心からお祈りします



## 大瀧仁志先生を偲んで

片山 真 祥

(平成十四年卒)

昨年、二〇〇六年十一月五日に大瀧仁志先生が逝去されました。既に立命館を定年退職されて横浜市内の事務所でご活動されており、直前にも卒業生とお会いになり、お元気だったということを後で耳にしました。本当に突然のことで、あのお元気な大瀧先生がなぜ、という思いが今でも消えません。

私が大瀧先生に直接お世話になったのは錯体分子化学研究室に配属された二〇〇一年から博士課程前期課程の途中までの短い期間でしたが、ご退職されてからもCOE客員教授として、またそれ以降も学会等でお会いする度、研究の内容や研究者の道について暖かく指導していただきました。特に私が後期課程への進学を決めてからは熱心に様々

なアドバイスをいただきました。

大瀧先生は一九九三年度から立命館大学理工学部にて化学科教授として着任され、東京工業大学、分子科学研究所時代から研究の中心としてこられた「溶液X線回折法による構造解析」に力を注いでおられました。特に「高温高圧下での水溶液」「混合溶媒中での選択溶媒和」について近年興味を持っておられたように思います。大瀧先生は学会活動にも非常に精力的で、我々学生にも参加するよう指導しておられましたし、ご自身も国内外の多数の学会に参加しておられました。ご退職されてからも学会の会場で先生にお会いすると安心したものです。その後たくさん質問を浴びることになるのですが、また、先生は写真を撮るのがお好きで、私が初めての学会で緊張しているのもおかまいなしで、ポスター発表の人ごみの中「はい、そこ立って、並んで並んで」と写真を撮っていただいたことはよい思い出です。

非常に多くの研究成果をあげてこられた先生ですが、学問としての溶液化学の発展に加えて日本の化学(者)が世界で大きな役割を担うべきだと常にお考えで、日本化学会や国際純正・応用化学連合などでも活躍でした。また、この立命館においても応用化学系のさらなる発展を考えておられました。大瀧先生の遺していかれたもの大きさを考えると、教え子の一人として身の引き締まる思いです。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

# 西尾 悟様

のご冥福を心からお祈りします



## 西尾悟先生追悼文

化学生物工学科

民 秋

均

西尾さんが二〇〇六年十月十五日に逝かれてから、もう一年が経とうとしている。もうそんなに経ったのかと思いつつ、日々の教育研究に追われていて、あつという間だけだと感じている。先日、大文字送り火のTV中継を見ながら(残念ながら)びわこくさつキャンパスからは、琵琶湖畔の花火は見えても、山の裏側の送り火までは拝めない。衣笠キャンパスなら左大文字が直ぐ目の前だったのに、「初盆だったなあ、ゆつくり戻ってきてたかなあ。」と感じていた。

西尾さんは大阪生まれで、北野高卒業後、京大工に入学し、博士取得まで京大で過ごし、三重大工で助手と東北大理で助教を経て、二〇〇四年四月から本学理工

学部教授に就任。応用化学科では極微機能化学研究室を主宰。この間、レーザーを利用した研究で数々の業績を上げられてきた。

着任直後から、私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」の「分子レベルでの複合体の構造機能解析と複合系材料の創製」プロジェクトのメンバーに「走査プローブ誘起ラマン分光装置の開発とナノ構造体の分子レベルでの局所構造・機能解析」というテーマで加わっていただき、数々の学内共同研究を立ち上げて、これから成果が出るようになり、その芽も出てきつつあるという矢先の急逝。残ったメンバーで大輪の花を咲かせたいと思っている。上記研究プロジェクト主催で、昨年十二月九日に追悼記念研究会をご家族もご足労頂いて開催することができた。西尾さんの優れた研究者の面だけでなく、趣味のフルート(日本化学会の化学オーケストラの重鎮であったことは有名)を通じた芸術家としての面も見られ、多数の参加者や遺児(二人の男の子)に対する奨学金賛同者に対しても主催者として感謝したい。  
(<http://www.ritsumei.ac.jp/se/rc/staff/taniaki/nishionem/nishio-mem.htm> 参照)

立命館での在職期間は二年半余りであり、一年ほどの闘病期間もあったが、西尾さんの足跡はしっかりと応用化学系に残っていると感じている。それではあなたのいつもの別れ際の口癖で、「ではでは!」。



# 企画運営委員会報告

委員長 篠原長政

(昭和四十三年卒)

企画運営委員会では、平成十年から会員の親睦を目的とした、「ゴルフ・懇親会」(応化会総会時における趣味のアンケート調査より)を春と秋の二回実施しています。ゴルフ・懇親会への参加者は、三組×五組で、当日に次回の期日を決めています。

ハイキングへの参加者は、七名から十六名程度の参加があります。二日前に連絡して参加されるなど気楽にお集まりいただいています。場所と期日は、昭和四十年卒の川口士郎氏に企画いただき(篠原も参加)、事務局にお世話いただいています。

本年六月十七日(日)の第九回応化会総会において「ゴルフ・懇親会」および「ハイキング」の新規登録をいただきました。さらに参加者が増えると期待されます。ゴルフおよびハイキングに対して応化会からの補助金はありませんが、ご登録していただければ、事務局から開催のご案内を差し上げます。

一方、写真に興味をお持ちの方、是非応化会事務局までご連絡下さい。「ハイキングと撮影会」や「写真展」などについて、立命館大学「写真研究会OB会」(応化会ニュース第二十号参照)から開催のご案内を致します。

尚、応化会の活動につきまして、ご意見等をお寄せいただきますようお願い申し上げます。

尚、応化会の活動につきまして、ご意見等をお寄せいただきますようお願い申し上げます。

応化会事務局電話およびFAX番号は一頁に掲載されています。

前回は三上正勝氏ならびに西村定氏に幹事をお願いして、十月二十七日(土)に日野ゴルフ倶楽部において開催されます。

応化会ゴルフ部において開催されます。

応化会ゴルフ部において開催されます。



## 企画運営委員会

中村尚武先生にお世話いただき、本年度の第一回企画運営委員会を九月八日(土)にびわこ・くさつキャンパスにおいて開催致しました。議題は、健康セミナー、卒業生教員集会、新たな企画等です。よろしくお願い致します。



「ハイキング」へと改称し、ご案内しています。本格的な山歩きではなく、ゆっくりテンポの「ハイキング」です。

「ハイキング」へと改称し、ご案内しています。本格的な山歩きではなく、ゆっくりテンポの「ハイキング」です。

「ハイキング」へと改称し、ご案内しています。本格的な山歩きではなく、ゆっくりテンポの「ハイキング」です。

「ハイキング」へと改称し、ご案内しています。本格的な山歩きではなく、ゆっくりテンポの「ハイキング」です。

「ハイキング」へと改称し、ご案内しています。本格的な山歩きではなく、ゆっくりテンポの「ハイキング」です。

# 雑感

木 全 豊 和 (昭和四十年卒)

昭和三十九年、杉田先生にお願いして工業技術院大阪工業試験所へ一年間出向(卒研)をさせていただいた。その時の縁で和光純薬工業(株)に入社し研究、営業、開発の各部門で楽しく仕事ができたと今あらためて感謝している。

会社を辞めて五年になる。この短い間に父親、母親を相次いで見送った。今まで仕事を理由にして両親のことは妻まかせであつたがなんとか最後に親孝行できたのではな

いかと思つている。現在はフリーになる前から始めていたウォーキングが中心で自宅近くの奈良公園、柳生街道、山の辺の道などを妻と一緒に歩いている。そのほか、絵(スケッチ、パソコン画)、ゴルフ、ギター、麻雀、スイミング、旅行等で今後は囲碁、詩吟、書道にもチャレンジしたいと思つている。

最近なんとなく不思議な感覚にとらわれる。まるで学生時代の夏休みのような生活である。もしかして学生時代から歳をとっていないのではとバカなことを思う。

もちろん写真を見れば嫌になる。だからあまり撮らない。最近では今年六月に応化会ハイキングで山科から大文字山に登り、銀閣寺から蹴上まで哲学の道を歩いた。この時大文字・火床で撮っていた写真



が最新作である。メンバー(十六名)はほとんど先輩諸氏であるが学生時代に戻つたように生き々とされていた。特に紅一点の一年先輩の美濃部治子さんは孫の話をしな

がらも軽々とした足取りで余裕さえ感じた。私だけが若いわけではないのだ。

YOUTH IS NOT A TIME OF LIFE ; IT IS A STATE OF MIND.

先日会社の後輩が定年を迎えたので大阪・キタで杯を交わした。定年後のアドバイスをとの問いかげには(セカンドライフはこうあらねば)的な発想ではなく興味を持つたらタイミングよくトライすることだと答えた。もちろんこれは自分自身に言つて聞かせていることでもある。今後とも次のテーマを求めてチャレンジしたい。そんななかで僕かでも社会貢献が出来るのであればと願つている。

# 卒業して四十年目の同窓会

大 石 峻 (昭和四十二年卒)

私たちが卒業したのが昭和四十二年つまり西暦一九六七年ですので四十年前になります。当時の理工学部は衣笠学舎、木造とコンクリートの建物が混在しており、大きな敷地内に衣笠球場もあり、学内道路の約七十%は無舗装だったように思います。

思い出話はこれ位にして本題の同窓会の様子をご披露したいと思います。

今回はタイトルにもありますように、卒業して四十年であり、社会に出て卒業を迎える年令になってきたので久し振りに集まろうということになった訳です。

大阪在住の足立勤君、京都在住の野田博之君と杉本恵之助君の多大な尽力で一月十三日京都駅前ホテルでの会合、十四日はゴルフの日程で開催しました。

初日は十七名の出席者で、四十年振りに再会の人もおり、最初は何か遠慮気味で、やや重苦しい雰囲気です。スタート、三十分後には小集団ができ先生方の思い出、自分のこと、欠席している友達のこと話の花が咲き、一時間後にはすっかり打ち解けて家族のこと、孫の話で満開、終盤は明日のゴルフと次回の会のやり方等の話題でアツという間の二時間でした。

二次会は祇園に行つたのですが、一次会

で全て言ってしまったのか又は酔いが回つていたのか、おっさん達のカラオケ大会となりましたが全日程を無事終了。

出席者は立命館大学で今も教鞭を執つている池田昌彦君、斉木加代子さん、会社代表や役員で、定年後地区自治会の役員で活躍中の方、唯のおっさんと多士済々。

翌十四日は有志十一名で蒲生ゴルフ倶楽部でプレー、天候にも恵まれ昨日とは違つて旧交を温めることが出来ました。ダブルリア方式で行い、山梨県甲府市から遙々参加の藤本民雄君が優勝し多額の賞金を獲得して全日程を無事終了、再会を約し解散。

また楽しい思い出が出来ました。

最後になりましたが、この会を開催するにあたり中村尚武先生にお力添えを頂きましたこと厚く御礼申し上げます。



# 「応化会に若い血を！」

目片 秀明 (平成四年卒)



素材開発に日々努めています。これまでの研究で、皮膚のはり・うるおい・透明感をもたらす女性ホルモンに着目し、その物質が年を取るにつれて減少していくのを防ぐ作用が、「日本の国花であるサクラ」にあることを見出しました。これからは新しい研究を続けていくにあたり、自分だけの知識や情報では限界があり、大学や他の研究機関の方々から新しい情報を手取る必要があると考えています。その点応化会の幹事会や総会などの集まりは、自分の枠を超えた様々な知識が得られる、異業種交流として最高の場であると思っています。

私は一九九二年の卒業生です。四回生と大学院の三年間、化学科生物化学研究室（現応用微生物学研究室）の立木隆教授にお世話になりました。就職も先生のお力添えがあり株式会社ナリス化粧品に一九九四年無事入社し、今では勤続十三年を迎えました。卒業後のある日、立木隆先生より電話があり「おい、応化会の常任幹事をやってくれ。」と依頼がありました。先生の頼みとあつては断れず、一九九八年より応化会の常任幹事を務めさせていただいております。

これまでに応化会の幹事会や総会に参加して感じたことは、二十代、三十代の若手の卒業生の参加が非常に少ないということです。そこで三十代の私が思う応化会の魅力について、自己紹介を交えながら少し述べさせていただきます。

私は「女性を美しく」をモットーに、老化した肌を若返らせる究極の化粧品の開発を目指して基礎研究を行い、新規化粧品の

また、応化会にはゴルフ会とハイキングがあり、色々な年代の人たちとじっくり話しのできる交流の場があります。個人的には私の趣味は釣りなので、釣りクラブが発足する日が来るのを楽しみにしております。

これからも応化会を通じて異業種間交流を活発に行い、趣味と仕事両方の幅を広げたいと思っております。是非皆様も一緒に参加して応化会を盛り上げていきましょうか。

## 新任の先生から一言

木村富紀先生



ばらしさを少しでも伝えていく事ができればと思います。本学は古くから名が知られる総合大学ですが、今まさに生命科学と言う新分野に展開しようとしています。そのさらなる発展のために今後精一杯努力する所存です。応化会の皆様のご指導、ご鞭撻の程を、よろしくお願い申し上げます。

### 略歴

一九八〇年三月 関西医科大学医学部医学科卒業  
一九八一年四月 関西医科大学大学院医学研究科微生物学専攻博士課程入学  
一九八四年十月 The British Council Scholar

明年に開設予定の薬学部薬学科の先行人事として、本年四月一日付けで理工学部応用化学科教授を拝命しましたので、応化会会員の皆様に一言ご挨拶申し上げます。私の専門は病原微生物学・感染症学で、主として、ウイルス（特にヒトレトロウイルス）感染症の病原性を規定する因子の発現調節機序とこれに拮抗する宿主防御免疫応答の解明を目指す研究を続けてきました。

分子細胞生物学の手法を駆使する病原微生物学・感染症学は、微生物を分子の言葉で理解しようとするものです。思いもかけなかつた発見からヒトを害する微生物の本質に迫る謎を解く時の興奮、これが研究の醍醐味であり、これまでの研究生生活を支えてきた原動力でした。立命館大学においては、若い学生達にこのサイエンスの楽しさ、す

一九八五年三月 関西医科大学大学院修了  
一九八六年四月 関西医科大学医学部助手  
一九八八年十月 Medical Research Council, Laboratory of Molecular Biology 博士研究員  
(Cambridge 大学：至一九九二年十月)

一九九二年十一月 関西医科大学医学部講師  
一九九五年四月 関西医科大学医学部助教授  
二〇〇六年一月 関西医科大学附属校方病院 感染症管理部副部長兼務  
二〇〇七年四月 現職

関西医科大学医学部 微生物学講座非常勤講師  
関西医科大学附属校方病院 感染対策委員会／感染管理チーム 学外有識者委員

## 下妻晃二郎先生



一九八八年四月 東京都立駒込病院外科  
医員

一九九二年四月 川崎医科大学外科 講師

一九九七年五月十一月 カリフォルニア大

学ロサンゼルス校 (UCLA) 公衆衛生院

客員研究員

二〇〇〇年四月 日本医師会総合政策研究

機構 主任研究員

二〇〇一年四月 流通科学大学サービス産

業学部医療福祉サービス学科 教授

二〇〇七年四月 立命館大学化学生物工学科

教授

本年四月より理工学部化学生物工学科に教授として着任させていただきました。二〇〇八年度からは、生命科学部生命科学科に移籍予定です。専門は、医療政策・管理学、臨床腫瘍学、緩和医療学です。二十数年来乳腺・甲状腺・消化器分野の診療に携わってきた経験を生かしつつ、社会・健康医学分野の研究を続けています。

生物・化学・生命科学の専門知識を持ち、医療政策の立案、製薬企業や健康産業の開発・マーケティング、医療情報産業などをリードできる先駆的な人材を育てたいと思っております。ご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

### 略歴

一九八一年三月 山口大学医学部医学科卒業  
医師免許取得

一九八五年三月 大阪大学大学院医学研究  
科博士課程修了 医学博士取得

一九八五年四月 大阪大学微生物病研究所  
外科 医員

この研究を発展させてノンコーディングRNAとの関わりを調べ、創薬へ結びつけた  
いと思っております。来年からは生命科学部  
生命医科学科に移りますが、皆様のご指導  
ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いい  
たします。

### 略歴

一九五八年十一月 長野市に生まれる

一九八三年三月 富山医科薬科大学医学部

卒業 医師免許取得

一九八七年三月 東北大学大学院医学研究

科修了

一九八七年四月 東北大学医学部医化学助手

一九八七年九月 医学博士(東北大学) 取得

一九八七年十二月 大阪バイオサイエンス

研究所 特別研究員・研究員

一九九二年一月 フンボルト財団 奨学研

究員(ハンブルク大学)

一九九三年六月 ジュネーブ大学分子生物

学・生化学 特別研究員

一九九五年五月 関西医科大学医化学 助

手・講師  
二〇〇七年四月 本学着任

## 西澤幹雄先生



本年四月より化学生物工学科に教授としてお世話になっております。専門は分子生物学と生化学で、これまでヒト・マウス・ラット等における遺伝子の発現調節機構について研究をしてきました。最近、炎症時に誘導される一酸化窒素合成酵素の遺伝子を中心に研究を行なっています。今後は

光機能材料です。私のこれまでの主要な研究テーマの一つに、液晶のような分子集合体の構造の光制御があります。この研究では、光化学反応を利用して液晶分子の配向状態を制御できることを示してきましたが、最初単純に見えた現象にもその奥には複雑なメカニズムが働いていることがわかり、自然の奥深さを実感しました。この分子システムについてわれわれはまだある一面しか理解しておらず、違う角度から眺めることで新しい発見があると考えており、本学ではこれまでの経験をもとに新しい方向へこの研究を発展させていこうと思えます。また最近、液晶とは全く異なる分子系の研究にも着手しております。今後、これらのテーマを有機的に関連づけながら、新しい現象や材料の探求を行っていくつもりです。



## 堤 治先生

本年四月に理工学部応用化学科に准教授として着任いたしました。専門は高分子化学、

応化会の皆様には、これからのいろいろな場面でお世話になることと思います。ますますご指導のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

## 略歴

一九九一年三月 佐世保工業高等専門学校  
工業化学科卒業  
一九九三年三月 熊本大学工学部応用化学  
科卒業  
一九九八年三月 東京工業大学大学院総合  
理工学研究科 化学環境工学専攻 博士  
後期課程修了  
一九九七年四月 日本学術振興会特別研究員  
一九九八年四月 カリフォルニア工科大学  
博士研究員

一九九九年一月 アリゾナ大学博士研究員

一九九九年五月 東京工業大学 資源化学

研究所 高分子材料部門 助手

二〇〇三年一月 (株) 荏原総合研究所 化

学研究室 研究員

二〇〇七年四月 本学着任



## 溝口 正先生



は生物化学で、「自然が創ったバイオエレク  
トロニクス…光合成系の分子構築と機能」を  
テーマに研究を行っています。光合成とい  
う生命活動の一端にふれることで研究室学  
生に自然の息吹を体感させ、更なる研究レ  
ベルの向上に努めていきたいと思えます。来  
年の新学部設置にともない理工学部も大き  
な転換期をむかえます。応用化学系の更な  
る発展に貢献できれば幸いです。よろしく  
お願いします。

## 略歴

一九九四年三月 関西学院大学理学部化学  
科卒業

一九九七年四月 日本学術振興会特別研究員

二〇〇〇年三月 関西学院大学大学院理学

研究科化学専攻博士課程後期課程修了

博士(理学、関西学院大学)

二〇〇〇年四月 科学技術振興事業団さき

がけ研究21研究補助員(博士研究員)

二〇〇〇年四月 立命館大学総合理工学

研究機構環境総合研究センター客員研究員

二〇〇一年四月 立命館大学理工学部助手

二〇〇二年四月 立命館大学理工学部講師

二〇〇七年四月 立命館大学理工学部准教授

(任期制)



本年四月より理工学部化学生物工学科に  
准教授としてお世話になっていきます。専門

## 橋新 剛先生



本年四月より理工学部応用化学科に助教  
としてお世話になっております。専門は無

機材料化学、固体結晶学です。これまで、  
繊維状無機結晶の合成および透過電顕によ  
る微構造観察に取り組んでまいりました。

本学着任後は、ナノサイズの炭素および酸  
化物を化学気相反応法および電気化学処理  
によって作製し、社会に貢献できるような  
応用特性を見出すことに取り組んでいます。

まだまだ未熟な点が多くありますが、諸先  
生方をはじめ、皆様のご指導、ご鞭撻のほ  
ど宜しくお願い申し上げます。

## 略歴

一九九六年三月 龍谷大学理工学部物質化

学科卒業

一九九八年三月 立命館大学大学院理工学

研究科物質理工学専攻博士課程前期課程

修了

二〇〇〇年三月 立命館大学大学院理工学

研究科総合理工学専攻博士課程後期課程

修了

二〇〇〇年四月 龍谷大学理工学部ハイテ  
クスリーサーチセンター博士研究員  
二〇〇〇年四月 奈良工業高等専門学校非  
常勤講師

二〇〇一年四月 長崎大学工学部材料工学

科助手

二〇〇四年四月 立命館大学COE推進機

構ポストドクトラルフェロー

二〇〇七年四月 立命館大学理工学部応用

化学科助教



## 矢野成和先生



本年四月より、応用化学系で助教として  
お世話になっていきます。専門分野は、酵素  
工学と応用微生物学で、「微生物酵素と微生  
物機能を用いた未利用生物資源の活用」に  
関する研究を行っています。現在、生物起  
源の物質が、廃棄物として蓄積し、環境へ  
の負荷になっていきます。これらを再生産可  
能な未利用の生物資源としてとらえ、微生  
物の酵素や機能を用いた積極的活用を見

出せば、資源の節約と環境保全に寄与できると考えています。

本年三月まで、二号助手を務めていましたが、これからも、誠心誠意、研究・教育に励む所存です。今後とも、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願いいたします。

**略歴**

- 二〇〇五年三月 立命館大学大学院理工学研究科博士課程後期課程修了 博士(工学)取得
- 二〇〇五年四月 立命館大学理工学部応用化学系二号助手
- 二〇〇七年四月 立命館大学理工学部応用化学系助教



**事務局だより**

○ 研究室や卒業年度毎の同窓会を実施される場合、開催案内等送付物を一括して事務局にお送りいただけます。ご一報下さい。

○ 応化会ニュース編集委員会では、会員の方からの原稿を募集しております。テーマは問いませんが、応化会ニュースに相応しい内容でお願い致します。ふるってご応募下さい。

○ 平成十九年度年会費納入のお願い  
平成十九年度年会費二千元を納入くださいますようお願い申し上げます。過年度分の会費の納入、未納入に関係なく、平成十九年度分を納入下さい。

年会費は会運営の柱です。全会員の皆様が完納下さいますようお願い致します。会員の皆様の会費納入状況を同封しております。平成十九年度分と共に、過年度分の納入につきましてもご協力下さい。送金には、同封の振替用紙をご利用下さい。なお、領収証は、郵便局の発行する受領証をもって代えさせていただきます。(注：平成十三年三月以降の卒業生は終身会費制となっておりますので、年会費納入の必要はありません。)

**編集後記**

応化会ニュース発刊以来早四半世紀を迎え、今回二十五号の発行の運びとなりました。これまで編集に携われた方々に改めて御礼申し上げます。本年六月、第九回総会を開催し、五代目の新会長を選出いたしました。また、十一月四日(日)にはサピアタワービルにて応化会関東支部総会を催します。二〇〇八年四月にはBKCに生命科学部ならびに薬学部が開設される予定です。私立大学で最大規模の教育・研究拠点として節目の期となり、このことと共に応化会もより一層の発展と充実を望みます。

(金川)



新学部 新棟イメージ

平成18年9月1日から平成19年8月31日の間に、死亡のご連絡を頂いた方々です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

**物故者**

|          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |  |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|--|
| 田邊 惇     | 梅津 幹雄    | 浜谷 孝彦    | 木村 孝彦    | 西上 広夫    | 鶏内 泰源    | 田中 統也    | 西浦 修     | 村瀬 定男    | 小谷 浩二    | 芝田 晃     | 吉川 利造    | 谷岡 治     | 大橋永之介    | 西岡 榮     | 藤山 教丸    | 田辺三千秋    | 福味 幸司    | 松下 友一    | 市位 利治    | 山田 正明    | 山田 清稠    | 生駒 好清    | 山田 友良    | 豊里 弘一    | 千葉 洋     | 嶋本 哲元    | 瀬成 忠     | 中西 忠     | 君島 勲     | 光岡 右儀    | 佐藤 準二    | 竹中 英雄    | 山西 義男    | 山田 桂     | 頗羅 久     | 細田 雅己    | 隆一       | 岩村 尚之    | 南村 一郎    | 房        |  |
| (昭和18年卒) | (昭和19年卒) | (昭和20年卒) | (昭和20年卒) | (昭和20年卒) | (昭和22年卒) | (昭和22年卒) | (昭和22年卒) | (昭和22年卒) | (昭和23年卒) | (昭和23年卒) | (昭和23年卒) | (昭和23年卒) | (昭和24年卒) | (昭和25年卒) | (昭和26年卒) | (昭和27年卒) | (昭和27年卒) | (昭和28年卒) | (昭和29年卒) | (昭和29年卒) | (昭和30年卒) | (昭和30年卒) | (昭和30年卒) | (昭和30年卒) | (昭和31年卒) | (昭和32年卒) | (昭和32年卒) | (昭和34年卒) | (昭和36年卒) | (昭和36年卒) | (昭和36年卒) | (昭和36年卒) | (昭和38年卒) | (昭和38年卒) | (昭和39年卒) | (昭和42年卒) | (昭和42年卒) | (昭和50年卒) | (昭和53年卒) | (昭和63年卒) |  |

(敬称略)

応化会名誉会員(敬称略)

石井 猛  
岩崎 弘通  
岡本 勇三  
河口 昭義  
北村 清  
近藤 紘一  
鈴木 啓三  
高橋 玲爾  
竹内 良夫  
谷利 陸平  
谷口 吉弘  
土屋 正夫  
橋谷 博  
林 眺  
林 隆俊  
深海 浩  
松田 二郎  
松田 十四夫  
三代澤 良明  
山本 善史

応化会役員名簿(敬称略)

顧問 大原八十八(30年卒)  
田村弘三郎(31年卒)  
木村 碩志(27年卒)  
北尾 舒彦(39年卒)  
荒木 武彦(43年卒)  
篠原 長政(43年卒)  
谷口 吉弘(40年卒)  
立木 隆(63年着任)  
岸 要(25年卒)  
上原 正巳(34年卒)  
金川 義孝(39年卒)  
川口 士郎(40年卒)  
中村 尚武(41年卒)  
池田 昌彦(42年卒)  
酒井 芳夫(44年卒)

庶務幹事

木越 俊雄(46年卒)  
松本 浩一(51年卒)  
前川 昭(52年卒)  
白井 総(56年卒)  
前辻 啓志(59年卒)  
目片 康人(61年卒)  
田口 肇(62年卒)  
小林 久人(平2年卒)  
目片 秀明(平4年卒)  
森崎 久雄(平5年着任)  
山田 佳博(平9年卒)  
矢野 成和(平12年卒)  
谷口 直哉(平15年卒)  
花崎 知則(平1年卒)  
松田十四夫(38年卒)  
白石 晴樹(47年卒)  
藤田 典久(51年卒)  
岡田 豊(54年卒)  
加藤 稔(院62年卒)  
水野 勝重(平5年卒)  
玉置 純(平8年着任)  
若山 守(平11年着任)  
前田 大光(平16年着任)  
高木 一好(平12年着任)  
澤村 精治(49年卒)  
小島 一男(52年卒)  
久保 幹(平8年着任)  
笠原 賢洋(平17年着任)  
香山 彰朗(31年卒)  
岡本 朗(32年卒)

会計幹事

高木 一好(平12年着任)  
澤村 精治(49年卒)  
小島 一男(52年卒)  
久保 幹(平8年着任)  
笠原 賢洋(平17年着任)  
香山 彰朗(31年卒)  
岡本 朗(32年卒)

会計監査

香山 彰朗(31年卒)  
岡本 朗(32年卒)

▼年度幹事▼

専門学校

昭和18年卒 新谷 利保  
昭和18年卒 野村祐三郎  
23年卒 桂 茂生  
24年卒 目片 昭芳

(一部工科)

20年卒 馬野 正敏

(二部理科)

20年卒 馬野 正敏

(二部理科)

22年卒 山田 益三  
24年卒 今達 緯治  
25年卒 竹内 良夫  
26年卒 八木 永治  
19年卒 奥(安井)悦  
20年卒 西村 新一  
25年卒 岸 要  
26年卒 九鬼 敏隆

新制大学  
(二部化学科)

27年卒 宇野 光造  
28年卒 九鬼 敏隆  
29年卒 東 龍夫  
30年卒 片山治市郎  
32年卒 廣瀬榮三郎  
33年卒 池田 茂  
34年卒 上原 正巳  
35年卒 寺井 良平  
36年卒 山本 好春  
37年卒 寺田 卓二  
38年卒 藤井 博  
41年卒 天田 健治  
42年卒 加納 修  
27年 岩崎 弘通  
富田 耕一  
磯島 文雄  
八木 本  
彌宜田峰太郎  
香山 彰朗  
岡本 朗  
磯野(田村)喜美子  
花澤 明  
佐々木 豊  
近藤 照雄  
大谷 芳亨  
松尾 篤治

(二部化学科)

27年 岩崎 弘通  
富田 耕一  
磯島 文雄  
八木 本  
彌宜田峰太郎  
香山 彰朗  
岡本 朗  
磯野(田村)喜美子  
花澤 明  
佐々木 豊  
近藤 照雄  
大谷 芳亨  
松尾 篤治

38年卒 松尾 篤治  
37年卒 大谷 芳亨  
36年卒 近藤 照雄  
34年卒 佐々木 豊  
33年卒 磯野(田村)喜美子  
32年卒 岡本 朗  
31年卒 香山 彰朗  
30年卒 彌宜田峰太郎  
29年卒 八木 本  
28年卒 磯島 文雄  
27年 岩崎 弘通  
富田 耕一  
磯島 文雄  
八木 本  
彌宜田峰太郎  
香山 彰朗  
岡本 朗  
磯野(田村)喜美子  
花澤 明  
佐々木 豊  
近藤 照雄  
大谷 芳亨  
松尾 篤治

松本 幹生  
金川 義孝  
川口 士郎  
東 正弘  
西原 正弘  
野田 博之  
伴野 清  
篠原 長政  
伊藤 省二  
長井 広次  
44年卒 長井 広次  
45年卒 村上 俊男  
46年卒 木越 俊雄  
47年卒 宮地 淳  
48年卒 白石 晴樹  
49年卒 寺石 雅和  
51年卒 松本 浩一  
久保田和孝  
前川 昭  
河村 眞也  
53年卒 河村 眞也  
54年卒 川澤 吉雄  
55年卒 坂本 隆  
56年卒 松田 信之  
57年卒 白井 総  
58年卒 片山 勝隆  
59年卒 北河 英次  
伊吹 和泰  
野口 剛  
長谷川圭一  
60年卒 長谷川圭一  
61年卒 菊池 英知  
62年卒 目片 康人  
63年卒 田口 肇  
坂根 正恭  
栗津 尚之  
平成1年卒 栗津 尚之  
2年卒 小林 久人  
3年卒 桐村 寛  
中井 武裕

4年卒 目片 秀明  
5年卒 北口 均  
6年卒 尼川 雅章  
7年卒 草野 富雄  
8年卒 宮武 智弘  
9年卒 村山 公一  
10年卒 磯貝 秀人  
11年卒 岡部 直樹  
12年卒 武田 周子  
13年卒 山田 佳博  
14年卒 岩井 啓能  
15年卒 川中さやか  
16年卒 小池 竜一  
17年卒 平本 豪志  
18年卒 山田 修司  
19年卒 山本 幸子  
20年卒 宇野健二朗  
21年卒 松宮 芳樹  
22年卒 矢野 成和  
23年卒 五十嵐亮介  
24年卒 籠橋福太郎  
25年卒 廣瀬 琢磨  
26年卒 網本惠美子  
27年卒 西田 悠里  
28年卒 谷口 直哉  
29年卒 原田 雅央  
30年卒 水戸部敬子  
31年卒 加瀬澤邦浩  
32年卒 加藤 豊  
33年卒 野田 悠太  
34年卒 濱口 直之  
16年卒 加藤 豊  
15年卒 谷口 直哉  
14年卒 西田 悠里  
13年卒 網本惠美子  
12年卒 宇野健二朗  
11年卒 松宮 芳樹  
10年卒 矢野 成和  
9年卒 五十嵐亮介  
8年卒 籠橋福太郎  
7年卒 廣瀬 琢磨  
6年卒 網本惠美子  
5年卒 西田 悠里  
4年卒 谷口 直哉  
3年卒 原田 雅央  
2年卒 水戸部敬子  
1年卒 加瀬澤邦浩  
16年卒 加藤 豊  
15年卒 野田 悠太  
14年卒 濱口 直之

白井 総(56年卒)  
小林 久人(平2年)  
目片 秀明(平4年)  
前田 大光(平16年着任)  
応化会二一入編集委員会  
委員長 金川 義孝(39年卒)  
副委員長 小島 一男(52年卒)  
委員 岸 要(25年卒)  
池田 昌彦(42年卒)  
澤村 精治(49年卒)  
藤田 典久(51年卒)  
目片 康人(61年卒)  
田口 肇(62年卒)  
水野 勝重(平5年卒)  
玉置 純(平8年着任)  
高木 一好(平12年着任)  
笠原 賢洋(平17年着任)  
名簿管理委員会  
委員長 前川 昭(52年卒)  
副委員長 白石 晴樹(47年卒)  
委員 宇野 光造(27年卒)  
岡本 朗(32年卒)  
松尾 篤治(38年卒)  
花崎 知則(平1年卒)  
加藤 稔(院62年卒)  
地域別活動推進委員会  
委員長 荒木 武彦(43年卒)  
副委員長 立木 隆(63年着任)  
委員 香山 彰朗(31年卒)  
松田十四夫(38年卒)  
谷口 吉弘(40年卒)  
酒井 芳夫(44年卒)  
森崎 久雄(平5年着任)

## 応化会 2006年度(平成18年度) 事業報告

### I. 諸事業

|                    |              |
|--------------------|--------------|
| 1) 2006年3月卒業生名簿作成  | 2006年 5月 ~   |
| 2) 在校生ソフトボール大会     | 2006年10月 15日 |
| 3) 応化会ニュース(第24号)発行 | 2006年11月     |
| 4) 全会員への通信、会費請求    | 2006年11月     |
| 5) 卒業記念パーティー       | 2007年 3月 21日 |
| 6) ゴルフ懇親会の開催       |              |
| ・第17回              | 2006年10月 7日  |
| ・第18回              | 2007年 3月 31日 |
| 7) 応化会ハイキングの開催     |              |
| ・第13回              | 2006年 5月 20日 |
| ・第14回              | 2006年11月 12日 |

### II. 諸会議

|                 |              |
|-----------------|--------------|
| 1) 幹事会          |              |
| ・第1回            | 2006年 6月 25日 |
| ・第2回            | 2007年 2月 18日 |
| 2) 常任幹事会        |              |
| ・第1回            | 2007年 3月 24日 |
| 3) 企画運営委員会      |              |
| ・第1回            | 2007年 3月 17日 |
| 4) 応化会ニュース編集委員会 |              |
| ・第1回            | 2006年 7月 9日  |
| ・第2回            | 2006年 9月 17日 |

### III. 支部活動(関東支部、東海支部、中国・四国支部)

|                 |              |
|-----------------|--------------|
| ・中国・四国地区懇話会・懇親会 | 2006年 5月 14日 |
|-----------------|--------------|

## 2006年度(平成18年度) 応化会決算

(単位:円)

### 一般会計

| 〈収入の部〉 | 予算額       | 執行額       |
|--------|-----------|-----------|
| 前年度繰越金 | 1,984,884 | 1,984,884 |
| 会費(一般) | 2,000,000 | 1,990,000 |
| 会費(学生) | 2,020,000 | 1,800,000 |
| 寄付金    | 250,000   | 274,180   |
| 雑収入    | 5,000     | 934       |
| 合計     | 6,259,884 | 6,049,998 |

| 〈支出の部〉      | 予算額       | 執行額       |
|-------------|-----------|-----------|
| 総会開催費       | 0         | 0         |
| 事業等補助金      | 200,000   | 9,000     |
| 地域別活動推進費    | 700,000   | 571,013   |
| 会議費         | 200,000   | 148,327   |
| 印刷費         | 700,000   | 319,214   |
| 郵送費         | 1,000,000 | 711,390   |
| 人件費         | 500,000   | 492,900   |
| 事務局費        | 50,000    | 48,264    |
| 雑費          | 100,000   | 6,000     |
| 拠出金(特別会計へ)  | 0         | 0         |
| 拠出金(連絡協議会へ) | 100,000   | 90,000    |
| 在学生活動援助費    | 200,000   | 200,000   |
| 振込み手数料      | 100,000   | 71,445    |
| 予備費         | 2,409,884 | 53,500    |
| 合計          | 6,259,884 | 2,721,053 |
| 次年度繰越金      |           | 3,328,945 |

### 特別会計

| 〈収入の部〉 | 予算額       | 執行額       |
|--------|-----------|-----------|
| 前年度繰越金 | 3,543,194 | 3,543,194 |
| 拠出金    | 0         | 0         |
| 雑収入    | 1,000     | 2         |
| 合計     | 3,544,194 | 3,543,196 |

| 〈支出の部〉 | 予算額       | 執行額       |
|--------|-----------|-----------|
| 人件費    | 500,000   | 213,400   |
| 事務局費   | 200,000   | 114,440   |
| 予備費    | 2,844,194 | 0         |
| 合計     | 3,544,194 | 327,840   |
| 次年度繰越金 |           | 3,215,356 |

## 応化会 2007年度(平成19年度) 事業計画

### I. 諸事業

|                    |              |
|--------------------|--------------|
| 1) 2007年3月卒業生名簿作成  | 2007年 5月 ~   |
| 2) 第9回応化会総会        | 2007年 6月 17日 |
| 3) 在校生ソフトボール大会     | 2007年10月     |
| 4) 応化会ニュース(第25号)発行 | 2007年11月     |
| 5) 全会員への通信、会費請求    | 2007年11月     |
| 6) 卒業記念パーティー       | 2008年 3月 21日 |
| 7) ゴルフ懇親会の開催       |              |
| ・第19回              | 2007年10月 27日 |
| ・第20回              | 未定           |
| 8) 応化会ハイキングの開催     |              |
| ・第15回              | 2007年 6月 2日  |
| ・第16回              | 未定           |

### II. 諸会議

|                 |              |
|-----------------|--------------|
| 1) 幹事会          |              |
| ・第1回            | 2007年 4月 22日 |
| ・第2回            | 未定           |
| 2) 常任幹事会        |              |
| ・第1回            | 2007年 7月 21日 |
| 3) 企画運営委員会      |              |
| ・第1回            | 2007年 9月 8日  |
| 4) 応化会ニュース編集委員会 |              |
| ・第1回            | 2007年 7月 21日 |
| ・第2回            | 2007年 9月 15日 |
| 5) 地域別活動推進委員会   | 未定           |

### III. 支部活動(関東支部、東海支部、中国・四国支部)

|         |             |
|---------|-------------|
| ・関東支部総会 | 2007年11月 4日 |
|---------|-------------|

## 2007年度(平成19年度) 応化会予算

(単位:円)

### 一般会計

| 〈収入の部〉 | 予算額       |
|--------|-----------|
| 前年度繰越金 | 3,328,945 |
| 会費(一般) | 2,000,000 |
| 会費(学生) | 1,760,000 |
| 寄付金    | 250,000   |
| 雑収入    | 5,000     |
| 合計     | 7,343,945 |

| 〈支出の部〉      | 予算額       |
|-------------|-----------|
| 総会開催費       | 800,000   |
| 事業等補助金      | 200,000   |
| 地域別活動推進費    | 700,000   |
| 会議費         | 200,000   |
| 印刷費         | 400,000   |
| 郵送費         | 800,000   |
| 人件費         | 500,000   |
| 事務局費        | 50,000    |
| 雑費          | 100,000   |
| 拠出金(特別会計へ)  | 0         |
| 拠出金(連絡協議会へ) | 100,000   |
| 在学生活動援助費    | 200,000   |
| 振込み手数料      | 100,000   |
| 予備費         | 3,193,945 |
| 合計          | 7,343,945 |

### 特別会計

| 〈収入の部〉 | 予算額       |
|--------|-----------|
| 前年度繰越金 | 3,215,356 |
| 拠出金    | 0         |
| 雑収入    | 1,000     |
| 合計     | 3,216,356 |

| 〈支出の部〉 | 予算額       |
|--------|-----------|
| 人件費    | 500,000   |
| 事務局費   | 200,000   |
| 予備費    | 2,516,356 |
| 合計     | 3,216,356 |